



在外研究レポート

著者	猪野 弘明
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	21
ページ	15-15
発行年	2015-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/00026105

在外研究レポート

猪野 弘明 准教授

私は2012年の秋から2014年の夏までの2年間、ランバース留学の制度を利用して、米国西海岸にあるカリフォルニア大学サンディエゴ校で在外研究しました。

米国で2年間滞在して受けたカルチャー・ショックの一つ、「住んで1年目の家賃と2年目の家賃が異なります。」私の見聞した経験では2年目は1年目に比べて100ドル以上（1万円以上）の家賃上げがあることも珍しくないようです。一旦住んでしまえば家賃が上がっても断りにくくなるので、2年目の家賃は高くなるというわけです。日本人の感覚としては、「同じ部屋なのに1年住んで住人が慣れたのをいいことに家賃を上げるなんて考えられない」と感じるかもしれません。

しかし、このことは経済学的な観点からはそれほど考えられないことはありません。経済学では別の時間や状況での消費は厳密には別の財であると考えます。1年目の部屋と慣れ親しんだ後の2年目の部屋はそもそも別の財と解釈できるので、別の価格が付くことはそれほど不自然ではないかもしれません。また、ある部屋から別の部屋に変更するには引越しなどに費

用がかかります。このようにある財から別の財に消費を移動するときにかかる費用をスウィッチング・コストと言います。このコストが重要なときに売り手が1年目を安く2年目を高く価格設定するのは、ゲーム理論的には至極もったもな戦略であるともいえます。^{※注}

米国に滞在して生活すると、家賃の例のように、日本にいるときよりもずっと直接的に「社会を経済学的で解釈できる」と感じる 경우가多くありました。しかしこれは、アメリカの社会が経済学的だからなのでしょう。私は、逆に経済学もしくはその教育体系が米国社会を説明するのに非常に適するように作られているためのように思います。米国の経済学者が自分たちの社会で起こっていることで重要な問題を想定しつつ、経済学を作り上げる努力をしてきた結果ではないでしょうか。

実際、米国は現在では経済学の本場です。日本にいるときは「本場ではこんな研究が先端で流行っているのだよ」というような話をよく聞きました。しかし、これはあくまで私が米国で見聞きしたことによる意見ですが、実際に現地
の研究者たちは流行りの研究分野などをそれほ

ど気にしていないように感じました。むしろ、多くの人が自らの重要だと思っ問題を探索してオリジナルな自らの領域を創り発信することに傾注しているのです。

この在外研究で私は逆に、自分の研究をいままでもっと「日本化」させたい、日本の社会に強く影響を受けた経済理論を発信したい、と感じ始めました。

（※注）スウィッチング・コストのもたらす価格戦略として、簡潔で分かりやすい解説としては、奥野『ミクロ経済学』（東京大学出版会2008）の第5章コラムを見てください。

